

鼎浦、小山東助論序説

——自由キリスト教徒の生涯と思想——

大内三郎

はしがき

Ⅰ 生涯

Ⅱ キリスト教急想

むすび 日本キリスト教史上の小山の位置

はしがき

小山東助（明治二一—大正八年）、鼎浦はその号である。今日では彼を知る者も少くなつた。彼を知るといへども、それはもっぱら政治家としての彼ではあるまいか。彼は宮城県本吉郡気仙沼町（現気仙沼市）の出身で、号はその海岸の名称よりとつた。二高を経て東京帝國大学を卒業し、新聞記者、専門学校の教授をつとめたのち、大正四年（一九一五）三月大隈重信内閣の時無所属（とはいへ立憲同志会の色彩が濃い）ではじめて第十二回総選挙に出馬した。市部（定員一名）村松山寿（同志会）、郡部（定員六名）藤沢幾之輔、村松亀一郎、亘理胤正（以上同志会）、菅原伝（政友会）、首藤陸三（同志会）、小山東助の順で当選、小山は最下位だった。しかるに、二年後の大正六年四月の第十三回総選挙では最高で当選してい

る。市部岩崎綜十郎（政友会）、郡部小山東助（憲政会）、齊藤二郎、沢来太郎（以上政友会）、亘理胤正、藤沢幾之輔（以上憲政会）、遠藤良吉（政友会）の順である。先きの選挙で内相大浦兼武が、明治の品川弥二郎のそれに優るとも劣らぬ選挙干渉に出たので与党系島田三郎の同志会が大勝を博し、原敬の率る政友会を破り、宮城県でも同志会が優位を占めた。その時辛うじて当選した小山だったが、次の総選挙で政友会が逆転優位に立ったとき、反対党憲政会の小山は郡部で最高位で当選したことは注目してよい。小山が政治家としてどの程度成長したか疑問がないではないが、理想をもち内政外交に該博な見識をもつた政治家であり、また大正デモクラシーの時代に親友吉野作造との関係もあつてきわめて斬新な政治感覚の所有者であつた。それらがその清廉な人格と相俟つて政治家としての地位を築き上げ、選挙民に買われたのである。けれどもそれまでしばしば病んだ呼吸器疾患のため大正八年八月二十五日死去した。時に三十九才であつた。

彼の短い生涯にもかかわらず、その生涯はきわめて多彩で、結局小山は政治家として落ちついたが、それまで分迷い揺れに揺れ

た。大学卒業後十数年間に新聞記者、教授、政治家と転々したのは、彼が多面的な才能の所有者であつたからで、それは祝福されてよいことかも知れないが、挫折もあり迷わざるを得なかつたことを想うとき、あながちそうとばかりいえない。私は本稿においてはキリスト教徒としての小山の人間像を考えたい。もう一步立ち入つていえば、彼は自由キリスト教徒であつたので、そうした観点から小山の生涯と思想（キリスト教）を捉えてみたい。そのことによつて彼の本質を見とけることが出来るのではないかと考える。これに關して彼の友人島地大等から異論のあることも知らないではない（参照『明治宗教史』大正十年）、私はそう考へる。

日本キリスト教史にも自由キリスト教徒とはユニテリアン (Unitarian)、ユニヴァーサリスト (universalist) およびドイツ普及福音教会 (Allgemeine-evangelische Kirche) の会員などを指す。近代的合理主義の影響を受けキリストの降誕および十字架の復活を否定し、三位一体の教義に立つ正統的キリスト教会の權威を拒否して、もっぱらこれを合理主義道德主義の立場で捉へようとする立場である。それほど大きな勢力になつたとは思えないが、ユニークな存在だつた。

一 小山東助の生涯

一

小山東助は宮城県本吉郡気仙沼町三日町寺路（寺路）（小林寺入（寺入））

口）に生れた。実母いちは東助幼時の時死し、父長兵衛は十九才の時小山家に婿入りし、博徒の同家をよく堅氣の家（鮮魚仲買業）に興し、これを小資産家にした。明治二十六年三月気仙沼尋常高等小学校を卒業すると、その前年設立したばかりの宮城県立尋常中学校（現仙台一高）に入學した。一年上に吉野作造（明治一—昭和八年）がいて廻覽雜誌『桜』のグループをつくつた。小山は文才があり、明治三十年九月（旧制）第二高等學校に入學すると、上級生の内ヶ崎作三郎から『尚志会雜誌』編輯委員に推された。小山は回顧していう。「十二三頃、沼南先生（島田三郎）が僕の郷里に來られた。観音寺（現気仙沼市本町）にあり、天台宗の名刹）の広庭に演説会の開かれた時、僕の従兄（金沢熊吉、継母とめの実家のもの、生糸商を営むところから東京横浜に取引あり中央の自由民権運動に關心があつた）が開会の辭を述べた。僕は巡查に叱られて会場に入り得なかつたが、老松檢の間から遙かに弁士の風采を望んで、政治家たらんと功名心を幼き胸に然やし始めた」（『六甲山麓より都大路へ』以下都大路へと略称、大正四年、『鼎浦全集』第三卷、以下その巻数をⅢの数字で示す、五〇五頁、挿入大内）。念のため高橋昌郎著『島田三郎』（昭和二十九年）附録年譜をみると、島田は明治二十四年九月から十月にかけて、さらに二十六年九月東北地方に赴いている。多分前者だと思われる。この時政治家たらんとし、それから東京の土産に買つてもらつた「小野梓の政治論や末広鉄腸の小説（いわゆる政治小説）や」を一知半解ながら読破し、なかでも「矢野龍溪の経國美談と無名氏の瑞西義民譚」は深い感銘をうけたという（都大路へ、Ⅲ五〇五頁）。野望をいだいたこの少年は、後

年大学を出ると政治家になるその準備のため、島田三郎が社長をしていた毎日新聞社の新聞記者になるのは面白い因縁である(後記)。

ところで、小山の生涯にはこの水脈のほかもう一つの水脈がたづねかかっている。それは宗教的求道のそれと云ってよい。彼は次のようにいっている。同じく幼少の気仙沼時代「予は嬉しくも日本に生れ出でしが故に、既に揺籃の時代に於て釈尊の光明に触るを得たり。即ち予は母の懐に在りて、寺に参り墓に詣で、不知不識、大慈大悲の法雨に沐浴したりし也。予は又幸にして特に明治の新しき日本に生れ逢いしが故に、小学校に入る以前に於て、覺束なくも耶穌の神彩を感じ居たりき。即ち予は幼にして天主教会の讚美歌を喜び、聖徒の画像を遊び、フランス宣教師の手より黄金色な十字架を与えられて無意味ながらも之を貴重視しき」(『久遠の基督教』明治四十五年、Ⅱ六五頁)。これはよくある話で珍しいことでもないが、小山の生涯を通じてかきたてられていた宗教信仰への熱情の路線をさかのぼるとここに帰着するのは注目すべきで、彼にとつて幼少期のこの体験は大きな役割を果たしている。

小山は東京帝大の哲学科(社会学専修)を出て新聞記者になった。その後「僕は書齋と街頭と二つながら之を愛する。」「静寂と活動と二つながら之を慕うのである」(都大路へ、Ⅲ五〇六頁)と云っている。これは実際には新聞記者になって政治家を志しながら街頭に出たものの、他方学者研究者になりたいと志をいだき勉強していたそのころの自己の心の揺れを告白したのだが、この動と静との揺れの底にはさらに政治家への志向と宗教への求道の志向とがあつて二重になつていたとみてよいと思う。前者について、二高

の後輩齋藤勇氏(東大名誉教授)は、小山が総選挙に出たとき本郷大津旅館に訪ね、彼から政治家になることが自分の長いあいだの念願だったと申されたといっているが(同氏談)、後者に関して、彼はじつさいキリスト教会の牧師伝導者になつたわけでないから観念的ともいえるが、その志向は最後まで崩れていない。私が本稿において考察しようとするのも後者の生涯にわたる志向を前提にしての話で、形式的にいえば、もともと宗教的求道者は、それ自身静寂、書齋に事足れりとせず活動を欲し街頭に往くという矛盾を孕んでいるともいえるが、小山の生涯の揺れには、右のような二元的亀裂が見られるのである。

二

ところで人は少年期に政治家憧れることがあつても、求道の志向を持つことはまずあるまい。求道の志向は人生にたいする根本的な自覚が生れなければ出て来ないのである。小山にその自覚がはっきり出て来たのは明治三十年九月二高に入学してのちのことである。

二高に入ると二年上級の内ヶ崎作三郎(明治〇一昭和二三)の推薦で『尚志会雑誌』の編輯委員になつたことは前に記したが、翌三十一年四月二十一日発行の同誌第二十八号に懸賞文募集の広告が出た。

「春夜独月に対する感」(文殊随意)という今日からみると大変ロマンチックな題で、審査は佐々醒雪のほか大須賀、滝川、椿、杉谷の諸教授、「叙事叙情の主観は学生自己にして決して小説家の結構をなすべからず十行二十字詰原稿十枚以内正楷にすべし。」投稿期限は四月二十日、「満校の秀才錦心繡腸を披瀝して名譽ある桂冠

を得るを勤めよ」とうったえていた。やがて同年六月三十日発行第

三十号の『尚志会雑誌』にその結果が発表された。一等賞佛壽生、

二等賞嶋夫、三等賞ノ一無名子、同ジク二星村生であった。佛壽生

とは三年生島地雷夢（黙雷の息子）で、無名子とは一年生の齊藤信

策である（小山「薄倅の秀才島地雷夢」Ⅲに二等とあるは誤り）。

島地もまた編輯委員で才氣煥発、鼻っ柱の強い高山樗牛教授（明治

二十九年九月から翌三十年四月迄在職）をして後世畏るべしと唸ら

せたほどだといわれ、その入選は予期されていた。これにたいして

齊藤はのち「野の人」と号して（その号は島地雷夢の姉藤井瑞枝女

史から貰った）知る人には知られているが、前記樗牛の実弟（兄樗

牛は齊藤親信の次男であるが、父の実家の兄高山久平の養嗣子とな

った）で、兄が秀才の名をほしいままにして令名高かったのにくら

べ、信策は「阿兄に似ない鈍物の称があった。」それがこの当選で

一躍文名を校内にはせた。小山がこの兩名とそのち終世変らない

友情をもったのはこの時からだといっている（都大路へ、Ⅲ五四五

頁。尚齊藤信策の「遺書」にも子の友人として小山、島地の名が記

されていて、これを裏書きしている。『明治文学全集』第四十巻、

四一八頁）。

ところで、二高時代の小山にはもう一つの友人グループが生れか

けていた。内ヶ崎作三郎、吉野作造（同級生）とのそれである。彼

等兩名は明治三十一年七月三日（それに前記島地雷夢を加えて）仙

台浸礼教会（当時仙台市北一番丁九十五番地）牧師中島力三郎から

浸礼を受け立派にキリスト教信者になっている。その頃二高では小

山の二年上の栗原基（三高教授）、深田康算（京大教授）がすでに

同じく浸礼を受けていて、そこへ内ヶ崎ら加ったので小山は大大

衝撃をうけた。「二高の学生仲間が僕の尊敬して居る殆んど総ての

先輩（吉野は同級生）が基督教に近づいて居った。彼等は学問の上

で優秀なる而已ならず、品性に於いて卓越して居った。僕は何か

知ら基督教の中に人を純潔高尚ならしむる力がある事を信じそめて

居った」（「薄倅の秀才島地雷夢」大正四年、Ⅲ五四六頁、『久遠

の基督教』Ⅱ七頁。挿入大内）。こういつている。内ヶ崎、吉野は

栗原らと当時米国侵礼外国伝道局（American Baptist Foreign

Mission Society）の婦人宣教師ブゼル（A. S. Buzzel 1866～

1936、1893米仙）の聖書講義（バイブルクラス）に参加して熱心に

聖書を勉強していた。ブゼルはなかなかの女傑であったらしい（以

上小生の手許に『ブゼル伝』なく、尚絅女学院図書館に問い合せ

た）。小山は彼女に学ぶかこれらの上級生同級生を注目して、

内ヶ崎らの入信に、衝撃をうけたといっているところからすると、

密かに彼もキリスト教に好意をよせ、自分も何日かはこのような決

断にせまられる時のあることを予想していたのかもしれない。け

れども小山は二高時代けつきよくキリスト教には踏みきってはいな

い。明治三十三年九月東京帝大入学と同時に吉野とともに一時東大

基督教青年会寄宿舎（本郷区台町？）に入舎し、先輩内ヶ崎（英文

学科）のいる本郷教会に出席している。その後ようやく洗礼をうけ

ている。三人は本郷教会牧師海老名弾正の許で信仰活動している。

彼等の友情は後々まで続き、内ヶ崎も小山も後本郷教会から統一基

督教会に移ったが、その友情には変化はなく、この本郷教会が友情

の地盤になっている。人間関係から見ると、内ヶ崎は二高以来誘掖

を蒙っている先輩であり、吉野は同級生でも俊才として名があり、いづれにせよ両者とも小山にとって一目も二目もおいた兄事するよ
うな間柄であった。

これに較ると、前者の齊藤らとのグループはたがいに隔意なく打ち明けられる間柄であった。姉崎正治は齊藤信策の側から「彼れは又少しも博く交わるを求めずして、只意気投合の友には肝胆を披き、真情を盡して交り、島地、小山等の諸友と共に居ては懇々と一切の世事を忘れたる仙人の如く、云々」(「嗚呼野の人」明治四十二年、『明治文学全集』第四十巻、三九四頁)といっているのは、当然小山の方からいえる。齊藤、島地ともに引込性で、中で小山が一番潤達な方だが、それでも吉野と比較するとはるかにシャイであった。それが共通の性格で、しかも各々自己の往くべき道を暗中模索し、それが各自異ってはいしたが、互に暖い眼で見守っていた。島地はむしろ吉野を侵礼に引つ張り、西本願寺きつての大物島地黙雷(天保九年一八三八—大正二〇一九二)を父とする家門に背いてキリスト教に走つても悔いない激しい熱情の持主であった。だが、巨大な家門はまた部あついで壁に島地の熱情も曲折を免がれることができなかつた。その苦悶と懷疑のなかで己れの道を再び模索しはじめたとき、彼に心の安らぎをあたえたのは小山、齊蔵の寛容な友情であった。道を求むる者はまた道を求むる者の傷つきやすい心を知っている。このグループの特長は求むる道はキリスト教にかぎらない。互に寛容な態度で異る道を尊敬しあっていた。小山、齊藤は雷夢の義弟島地大等に仏道を学ぶこともあった。

本稿において自由キリスト教徒としての小山東助を考察するので

あるが、彼をかく自由キリスト教徒たらしめた源は幼少時仏教に、キリスト教に双方と親近感をいだき、それが二高時代友人グループを通じて強力な求道的志向をいっそう自覚せしめられるなかで、齊藤、島地らの異質な仏道への態度に魅せられ、それが終始彼の脳裏を離れずこれを重視したことが消極的原因になっている。それと同時に、基本的にキリスト教に関しては海老名の影響をうけたことが積極的理由になっている。そしてさらに自由の方向でキリスト教信仰を開花させているところに小山の自由キリスト教思想があつた。私はそう考えている。

三

繰り返かえずが、小山は明治三十三年九月東京帝国大学に入ると、海老名弾正の本郷教会に出席している。この教会にはすでに内ヶ崎、深田の両先輩もいるし、また吉野も自分と同じく出席している。そして明治三十五年三月二十日同教会で洗礼をうけた。

日本組合基督教会本郷教会は、海老名が上州から上京して明治十九年(一八八六)八月十日本郷湯島四丁目神田明神前の大名屋敷の一角を借りて伝道した時に始る。そののち事情あつて海老名は熊本、神戸に伝道、代つた横井時雄が明治二十四年四月本郷東竹町に会堂を建設したが、横井、そのあとを受けた村井知至、渡瀬常吉牧師の時期はそれほど活発ではなかつた。海老名が神戸教会を辞任し、東京に戻つて再び本郷教会の牧師になるといつたんこれを解散して無所属の本郷教会を設立した。それが明治三十年(一八九七)九月で、翌三十一年三月本郷の大火に類焼し、菊坂の日本基督教

会本郷教会、老岐坂の普及福音教会の会堂で礼拝を済ませていたが、同三十四年十一月九日ようやく老岐坂に教会堂を再建した。小山はこの献堂式に明道会代表として祝辞を読んだりしている（「新人」第二巻第六号明治三十四年十二月号）。してみると、本郷教会で活動しているのである。その年礼拝の人員は平均百二三拾名を数えた。「新人」に伝えられているが、『弓町本郷教会創立七十年史』（昭和三十年）によると、明治三十七、八年当時の様子を次のようにいっている。「働き手は、副牧師野口末彦氏、名誉伝道師加藤直士氏、婦人伝道師鹿子木津也師であった。内ヶ崎作三郎氏の聖書講義は聴者を引寄せたり。加藤直士、小山東助、相原一郎介、内ヶ崎作三郎、先代小林富次郎氏は、組合教会集中伝道の一大偉力であった」（八頁）。

小山は吉野らとともに明治三十七年十一月より海老名が主幹となつている『新人』（明治三十四年月刊）の編輯記者になつて筆を振るようになり、また本郷教会で重きをなしていた松井昇の娘菊野と結婚（明治四十年三月二日）、しばしば本郷教会の講壇に立つようになり、海老名の信任もあつく、しだいに教会の指導的立場に立つてきた。

しかしここで何よりも重要なこととして指摘したいのは、小山に海老名の思想的信仰的影響が非常に大きかつたことである。明治三十四年の初秋仙台から上京してきたばかりの小山の眼前で、俄然『新人』に據る海老名弾正と『福音新報』に立つ植村正久（安政四年—大正二四）とのあいだに、いわゆる植村—海老名基督論々争なるものが

起つたのである。小山はこのことについても何ら言及するところがないが、自分が求める道の師として頼む海老名が、『新人』で翌三十五年にかけ十ヶ月になんなんとする論争に挑む姿に我関せず焉とした態度で傍観していたとは思えぬ。何を感じ汲みとつたかは別としても、終始見守つていてもけつして不思議ではない。海老名のキリスト教思想把握の姿勢として思想そのものがずばり繰りひろげられるこの論争に素知らぬ態度をとつたとは思えない。

この論争については私は再度言及考察したこともあるので（参照、拙稿「植村—海老名基督論々争」『福音と世界』昭和三十二年一月号、共著『日本キリスト教史』昭和四十年）、繰り返す煩を避けるが、後段にのべる小山のキリスト教思想との関聯もあり、一言海老名の思想のキリストを中心にした部分をかいつまんでのべると、①海老名は、イエスの生涯その生誕から十字架の死と復活にいたる生涯の歴史的事実そのものに父なる神の啓示を認めるのではなく、これをイエスの心性に認めようとする。海老名独自の考え方が、神の「啓示」すなわち「神は人類の父であり」愛の神であるという「啓示」はイエスの曇ない鏡の如く神の姿を映せる心にして、始めて生起しうるのである。反対に「其の心若し汚塵を有し、或は擾々不安の念あらば心眼常に怒の神、責罰の神、妬の神を視」なくてはならない。そのなかでもイエスの十字架こそはイエスの心がまったく神と融合し、犠牲となり、その使命を果たし、復活して霊界に生存する確信を弟子らに授けたものであるとする。②海老名はイエスにおいて神を見ることが出来る、「啓示」であることを否定しない。けれども彼はイエス・キリストを神格として信じるのではなく

イエスはあくまで人間であり人間以上の何者でもなく、そのイエスにおいて神との合一が見事に示されている。それ故「キリストを師表として仰ぐ」ことが出来る。イエスをあくまで人間としてはつきりとらえて、それが神の啓示であるのは正にそういう意味においてであった。③したがって海老名にあっては究局において十字架上の死と復活によって成就されたキリストの贖罪の奥儀は、勿論否定されねばならないし、また人間の負債である原罪そのものの真相が理解されない憾みがあるといわざるをえない。

四

明治三十三年九月に東京帝大哲学科社会学専修に入学したことは前に記した。社会学講座が設けられたのは明治二十六年で比較的新しく、当時建部通吾が講座を担当していた。小山がこれを専修したのは、どちらかといえば便宜的で「政治に、文芸に、哲学に、宗教に、僕の心は動揺して暫くも集中する所がな」く、「社会学」ならば自分の「多方面の趣味を満足し得る」(都大路へ)、Ⅲ五〇六頁、(傍点大内)と考へ、そこで社会学を専攻したと彼自身いつている。小山は人生の曲角でいつも迷う。迷いつているときが曲角かともいえる。しかしその動機が何であれ、彼が社会学を着実に学んだこととはたしかで、それは明治四十二年彼が大学を卒業して六年目二十九才の時『社会進化論』(博文館出版)という立派な学的業績でも知られる。これについてはまた後に触れる。

彼は社会学をよく学んだと思われるが、学者としての道を歩まず卒業すると直ちに毎日新聞社に入って新聞記者になった。それは

「記者生活其者を僕に愛したというよりも、議院に入る(政治家になる)の階梯として之を択んだ積りであった」(同上、Ⅲ五〇六頁)。政治家志望は彼の多年の夢で、新聞記者→政治家のコースはすでに明治初期自由民権運動さかんなるころよりの一つのパターンになっていた。さらに当時新聞社々長が島田三郎で、島田は毎日新聞を背景に星亨攻撃、足尾鉞毒地救済活動、娼婦運動援助、軍備縮小日露協調論、選挙権拡張問題等で活躍し、明治三十六年三月一日の第八回総選挙に三菱の女婿加藤高明と戦つて不利だといつて予想を裏切るように当選して天下の注目をあびていた(高橋昌郎前掲書、一〇四—一〇六頁)。前に記したように、島田は小山の長年敬慕して止まなかつたところで、島田自身小山をどう評価していたかその辺のところも考慮に入れなければ正確な判断は下せないが、後年小山が総選挙にはじめて出馬したとき島田の支援があつたことはたしかで、彼の新聞記者は政治家としての足がかりに好条件といわねばなるまい。

だが、この時期好条件にめぐまれていながらまたしても彼は迷つていたのである。①小山は社会学を専攻し、その研究は卒業後も依然としてつづけられている。それは前記明治四十二年の『社会進化論』の業積になつてゐる。そのまま社会学に集中していけば学者として立ちうることも考えられる。「街頭」に出て新聞記者の仕事にはげむ一方で、「書齋」に入つて勉強していたわけで、そこに(社会)学者として立とうとする志が秘められていたとみる事ができる。もしそうでなければ、このようなことはとくに必要はなく、一途に政治家としての稼業への準備をしていけばよい。②明治四十二

年二月に右の『社会進化論』を刊行すると、まもなくその九月に早稲田大学講師になった。全集年譜によると「倫理及新聞研究科の諸講座を担当す」(Ⅲ二頁)とある。それは小山に正に願ってもないよいポストとみたか七月には新聞記者を辞職している。この前後彼は健康を害している。それが新聞記者生活に堪えられなかったせいかもしれないが、記者生活から足を洗っている。早稲田大学には、熊本洋学校以来海老名に親しく本郷教会にもよく手伝っていた浮田和氏(安政六年—昭和二年)が政治史西史を担当し、また内ヶ崎が英語の教授をしている。小山を早稲田に推挙したものとすると、この兩人かもしくはどちらかわからないが、その理由として『社会進化論』の業績があったことが考えられる。③そののちもまた多少の曲折があつて、二転し新聞記者になつたが、三転して小山は大正二年(一九一三)九月神戸にある関西学院高等学部文科長に就任し、哲学(一般、社会学もふくむ)の教授になつてゐる。内ヶ崎の推薦であるところからすると、早稲田大学には就職が成らなかつたようで、小山自身も「孤影悄然、関西に流鼠の身となつた」(「都大路へ」Ⅲ四九八頁)と練りかえし、珍らしく嘆いてゐる。そのころ病氣療養の菊野夫人を湘南の地にのこして生木を裂かれる思いだつたに相違ないが、それまででしてうして学者稼業に専心しようとしたのか。その執念には私は疑問がのこるのである。

小山はいよいよこの辺で納つたかと思つたやうではない。大正四年(一九一五)一月前記総選挙出馬のため在職一ヶ年半足らずで関西学院を辞してしまつてゐる。政治家になることが多年の念願だつたといひ、総選挙も費用もかかり大がかりな選挙運動もせねばなら

ない大変なことであるところからすれば、小山として正に一生一代の賭けであつた。ここで小山はその生涯の迷いに終止符を打とうとしたのである。

因みに補足したい。関西学院は米国南美以教会(Methodist Episcopal Church, South, 明治十九年日本伝道開始)が明治一

十二年設立し、それが明治四十年(一九〇七)メソジスト系教会三派合同(南美以のほか美以教会、カナダ・メソジスト教会)を機に同四十三年よりカナダ・メソジスト教会と共同して経営することとなり、学校機構を改革し、神学部、普通学部のほかに高等学部(旧制専門学校)が設けられ、そのなかに文科、商科が置かれた。文科は三、四年になると、語学及び文学、歴史学及び社会学、理学及び数学の三課程に分たれて専攻別と珍らしい肌理こまかい仕組みになつてゐる(『関西学院史』昭和四年、八四—六頁)。社会学出身でキリスト教徒としての小山には好条件の学校であつた筈だが、しかし文科を設置したもののしばらくは卒業者が出ていないところを見ると、文科長である小山としては居心地がよくなかつたのではあるまいか。次に彼の『社会進化論』であるが、これは社会を進化論的に論じ、ダーウィン(C. R. Darwin)、スピンサー(H. Spencer)、ハックスレー(J. S. Huxley)、フレイモンント(H. Drummond)、クロポトキン(P. A. Kropotkin)、キッド(B. Kidd)ほかの学説を一つ一つ丹念に紹介している。進化論(Darwinism)が米国の動物学者モース(E. S. Morse, 1838—1936)が東京大学教授に招かれて以来俄かに学界に騒がれ、生物学のみならず哲学に影響を及ぼしていることは当時の『東洋学芸雑誌』

を見れば了解できる。特に明治十五年加藤弘之(天保七年一八三六一一九一六)が『人權新説』を著わし、従来とってきた民権論から國權論に転向して論議をよんだことは周知のごとくで、これもダーウインほかの「進化哲学の類を読むことにもなつて、宇宙觀人生觀が全く變化したためである」(『加藤弘之自叙伝』大正四年、四七頁。尚これに批判的なものに渡辺和靖「加藤弘之の『転向』」『日本思想史研究』第五号、昭和四十六年がある)。そののち有賀長雄『社会進化論』(明治十六年)あり、その他建部通吾、浮田和民、遠藤隆吉も社会進化論に触れるところがあつたという(同著「例言」一四、五頁)。(明治の上昇発展する日本の国家を背景にして進化論(theory of evolution)は社会学を理論付けるに大きな役割を果した。小山の『社会進化論』は西洋社会学者の諸説をよく集成して、その論旨も堅実であつた。

五

大隈重信内閣が民衆政治家の内閣と期待されながら誕生したのは大正三年四月十六日である。同年六月オーストリア皇太子がセルビヤの一青年によつて暗殺され、それに端を発して戦乱はまたたくまにヨーロッパ大陸に拡がり第一次世界大戦となつた。日英同盟の誼しみて日本も対独宣戦布告し青島に攻撃をかけた。その上対華二十ヶ条を要求し西園寺内閣以来の二ヶ師団増設問題で同年三年十二月二五日衆議院解散となつた。反対党の政友会は原敬を総裁に解散前一八四名の代議士を擁してただけに「七十九才の大隈首相が選挙の陣頭に立つなど世の人氣を煽ること多く、殊に早稻田大学関係

者が大挙して援助し、人氣の引立つるに与か」つたといわれている(『三宅雪嶺「同時代史」第四卷、四八九頁)。農相大浦兼武を内相に入換えて選挙干渉に辣腕を振わせる一方、大隈自ら第一線に立ち仙台駅でも短い停車時間に選挙演説をやつてのけ、それは今日でも語り草になるほどの奮闘振りで、早稻田大学関係者も総動員した(信夫清三郎『大正政治史』昭和四十三年二二五—二七頁)。島田三郎は立憲同志会を率いて大隈をたすけた。小山は無所属で出たが、この立候補は早稻田の内ヶ崎さらには島田の慫慂によるものと思う。両者とも宮城県に馳けつけて応援し、内ヶ崎は両三に及んでゐる。

小山は「平和主義、民本主義、理想主義」こそ自分の標榜するところであり、また社会的革新は二つの眼目にある。「其の一は所謂社会問題なる者で労働者雇主の關係である。其の二は婦人問題と称して宜しいかろうが、男女關係に基く問題で」そしてその根底に「人」「人格」の觀念がなければならぬという(『社会革新の眼目』大正四年、二三六頁)。このような斬新さを持つてゐる一方で、彼の政策論などきわめて現実なところもあつて少くない。

彼の政治的立場は①内政面 基本的に親友で近代的政治学者としてまた民本主義者として抬頭しはじめた吉野作造(明治一—昭和八年一八七八—一九三三)と無關係でない。小山は現在「政治的中心勢力」をなすものが「元老、閥族、議會、政党、民衆」で、そのなかで「元老、閥族」の排除こそ民衆の上に立つ議會政治を貫くものでなければならぬ。そこにデモクラシーの意味があるという。小山は民衆政治家たらんとした。デモクラシーは「民本主義」と記されるが、それは必ずしも英語の翻

訳ではない。「実に建国以来の大精神で」「君民一体の国体と云うべきか、君は民を以て本とすると云う秩序」（『尊王排閩論』大正六年、一四八五頁、傍点大内）なのだと主張する。吉野の「民本主義」が山川均から批判をうけてはいるものの優れた意義をもっていたことは周知のごとくで、それには触れないが、小山の「民本主義」の理解に吉野が次のごとくいて、注目してよい。民本主義には「社会的要求」つまり自分の生活の安定充実の要求と、「政治的要求」国政の運用への参与の要求とがある。「世間には民本主義に云うものは昔から日本にあったと云う人があります。併し昔からあったと云うのは、第一の社会的要求の方面であって、第二の政治的要求と云う方面は昔は無かった」（『近代日本政治思想史』昭和四十五年Ⅱ一六六頁に引用されているところ）。②外交面 対華二十一ヶ条が喧しかった折柄、小山はいう。「日本の自立を全うする迄は、即ち国家的国民生活に必須不可欠なる物資原料の供給を円満自由ならしむる迄は、その勢力圏の拡張を中止する訳に行かぬ。之が日本に於て是認ざる可き帝国主義の論理である。」すなわち「平和の手段を旨とする帝国主義は強ちに拒否す可きではない」（『平和主義を宣伝する』大正八年、一四〇八・九頁）。平和的な帝国主義とはそれ自身矛盾をふくんでるのであって、これは浮田和民の思想の影響とみる。彼が国内的には立憲制度を、対外的には平和な帝国主義を強調したことは有名で（『倫理的帝国主義』明治四十二年）、それを小山は踏襲しているのである。

小山の現実認識は「先づ第一に欧州の動乱によつてもたらされた日本の新たな世界的地位を最も重大視した。第二に亜細亞大陸に於

ける日本の發展上今日を以て千載一遇の好機と考えた。第三に無観想の多数党（政友会）を打破して、民衆主義の新政党を樹立せざる可からずと信じた」（『都大路』Ⅱ五〇八頁）。右の第一にみられるように、見識は該博で理想がある。彼は日本を新しい世界的地位に立つ勢力たらしめこと第一の理想だとうったえている（『日本国民の三大理想』大正七年、一五三〇頁）。しかしその理念が優れて新鮮である割に實際政治は平凡である。大正四年ドイツのミリタリズムを批判して「日本も亦ミリタリズムを以て覇を称うる運命に立ってはいぬだらうか」（『戦後の日本に対する基督教の使命』Ⅱ、二四五頁）と日本のミリタリズムを鋭く予感しながら、実際には「今後の外交方針もひつきょう此国民的立場を本とし遂行せねばならぬ。日英同盟に仮令多少の亀裂ありとも、日本は現在廿一師団を以て大陸を制するに足り。八四艦隊の成就を以て太平洋の安全を期し得るだけの外交的地位を確保せねばならぬ」（『平和主義を宣伝す』大正五年、一四〇五頁）。日本は「現に來りつつある世界的經濟戰に於て最後の勝利者たらんこそ、日本帝国焦眉の急務である。而して此經濟戰は全世界に亘るに相違ないが、支那大陸は日本に取つて大事な平和的戰場である。ここで捷利を占めねば日本の将来は空である」（同上四〇四頁）。日本が中国で勝利を占めたとき、中国人はどうなるのか、理念的には軍国主義を打倒する平和主義も現実には膚寒い平和主義に陥っている。

Ⅱ 小山東助のキリスト教思想

小山の政治家としての清廉さ誠実さについてはかなり評価されている。政治家としては学者肌で理想をもち、高尚な理念をもち、その政論も理路整然としているが、しかし文献から推論するならば、彼の政治家としての論理と政治家としての現実とのあいだにはちぐはぐなところが見られないではない。それは小山が駆け引きがあったとか裏があったということではなく、彼の人間の善さからくるのかも知れない。すなわち理想を追求する上できびしく、自己を律する上で厳格な禁欲的態度を崩さないが、実際の政治行動で善意に事をうけとめ安易な妥協がみられる。そこで政治家としてのどの程度成長したか疑問なしとしないといった。しかし小山が長い生涯をもち得たならばあるいは政治の場の修練でもっと鍛え上げられ、大成したかもしれない。しかしそれはあくまで彼が長生きしたならばの假定の上の話で、やはり現実四十の不惑に達せず没した実際の小山を凝視する必要がある。その点からすると、彼のもっとも精根こめた活動は文筆活動であり、実際にその文筆活動の内容は文芸、社会、思想、政治、外交、宗教にわたる評論ではなかったか。してみると、小山の華々しい活動は、彼の意図はともかく評論家たる点にあったと見ざるを得ない。

ところで、中村吉蔵が小山を論じていっている。「鼎浦君は唯、文学者肌と云った丈では済まされぬ。あまりにも多方面に、多角的な人物であったことは勿論である。しかし文学的ということが、最も綜合性を帯びたものだとする意味からすれば、君が社会学者であり、宗教家であり、又新聞記者たる性能をも備え、更に政治家、政論家たる材料をも兼ねている。その多方面多角形の精神組織の中

核を一貫していたものは、実は文学者たる君であった。言葉を換えるならば、君の詩人的素質が四方八方に放光して、或は紫に、或は黄に、或は赤く、或は白く、炫耀し、反映したのではないであろうか」(「文学者としての鼎浦君」Ⅲ序、一、二頁)。私は大変面白い表現だと思っている。その前半(社会)学者、宗教家、新聞記者、政治家であるとするにも間違っていないが、その活動の内容は評論にあったといわざるを得ない。そしてその「多方面多角形の精神組織の中核を一貫しているものは」と、「文学的」なものとして「総合的」と広義に解釈して「実は文学者たる君であった」としているのはいささかオーバーといわざるを得ない。それは文学とはおよそ範疇を異にする彼の宗教的信仰思想、いにかえるならば彼の生涯において到達したキリスト教信仰思想と、それに立つ不惑の求道的態度ではなかったかと考える。その意味で彼は学者、宗教家、新聞記者、政治家であったとそれらを同一次元にみてよいと思うが、彼の全体的思想構造において、社会、政治、文芸等の思想と宗教思想、キリスト教思想とを同じく同一次元において捉えることは妥当と思えない。もっとも本稿においてその関聯の検討考察は紙数の関係もあり、別の機会に譲り、キリスト教思想そのものだけを考察するに止めたい。

二

小山のキリスト教思想への接触把握の方法は三つある。(それはこの方面の主著『久遠の基督教』明治四十五年においても言えるが、それは改めて後に触れる)それらは互に絡んで働いているが、

(1) 自己中心的思考法 これは小山の意識のなかでもっとも強力に働いている。結論的な言い方をすれば、「キリスト教の中心問題は最早神にあらずして基督にあらずして、全く『我』に在り。人々はデルファイの城内に(ママ)書かれたる汝自身を知れよの教訓に立ち歸りて、そこに最高価値、窮意權威を発見せずんば止まざるの概あり。火焰の中に神はあらず、雷鳴の中にも神はあらず、神は『我』てふ者の衷に在り。」(「基督教思想の中心問題」天正三年、Ⅲ二〇八頁)。小山において道を求むる自己として自覚されているのは近代的自我といつてよいと思う。彼の生涯の求道生活とは、この自我のもつ最高価値を充足せしめる活動であり、「極言すれば最高価値を発見せざるもの活動は、真実の意味に於ける個性を欠ける者の活動に過ぎ」ないという(「全人の生活を想う」明治四三年、Ⅳ四五〇—一頁)。名誉欲、財産欲も生の享樂とするならば、高尚と思

れがちである「学問も芸術も宗教もその源に遡れば皆是れ生を享樂せんとする人類の祈りの発現」で、この祈りなくしては「人類の欲望も煩悶も精神」も理解することできない。人間が音楽美に恍惚とし、名誉心に熱狂するとき、そこに「生命の悅樂」を感じとっているわけだが、その時また「自らの最高価値を発見して」いる(同上、四四九—五〇頁)。かくして彼は生の享樂、生命の悅樂をそのまま肯定してその自己充足をとく自然主義者でもあったが、さらに「諸欲滅盡現身超絶」の世界への悲願をこめて涅槃寂靜の靈覺真心の境を希求した。小山は洗禮を受けてのち「仏弟子」となった。そこは「風も吹かず、流も流れず。有胎も生せず、日月も出沒せず、一切の意識も亦滅盡する無為の世界である。」(「予は仏陀より基督に

往けり」明治四四年、Ⅱ二七—二、三頁)。だが小山はその世界にも満足できなかった。それは釈尊が「偏に消極的言辭を用いて『永遠の否定』を説くに専ら」でそれ以上に出なかつたからである。小山が自己を放下し、放下する自己をも放下するところでも自己を最高価値化する方途を発見できないと自覚したが、正にその所で、それを耶蘇イエスその人に、その「品性と生涯と思想と事業」光彩陸離たるところに見出したという(Ⅲ七九頁)。今は形式的な仕方でのべたが、以上のごとくである。

(2) 進化論的方法 右がキリスト教に接触把握する自己主体の内側から出てくる方法だとすると、これは端的に対象としてのキリスト教そのものに関わる方法である。そもそもダーウィニズム(原著者は「ダルウキニズム」と記しているが上記のように改め統一した)は「生存競争、自然淘汰、適者生存」の法則である。この法則の背景には一般的に生物進化という一大定説があり、「ダーウィニズムは此の事實を説明する最有力の創見で、その淵源由来は久しい者だが、兎も角ダーウィンの努力と天才に依つて大成せられた学説である。」(このこと自体まず問題はないとして、それは生物現象、自然現象を越えて社会、文化現象に適用され得るものか。「人類も生物の一種であるから文化を開発し来るに及んで、最早単なる生物ではない。生物的性質以上に心理学社会学的性質が発生してきた。茲に於て純粹なるダーウィニズム本来の適用区域は自ら制限はない。即ちダーウィニズムにして科学的真理なりとせば、人類の生物学的性質に關係したる範囲内の一切現象を説明するに於ては真理として認めざるを得ないが、範囲は先ずここに制限せらるべき筈である。

真摯なる学者は第一に此の制限を明らかに意識せねばならぬ」(『進化論と基督教』明治四二年、Ⅲ九六―七頁) 小山はその間の学的操作に關してはきわめて慎重である(同じ事は『社会進化論』第一章に於いても見られる)。もともとそれはダーウィンを慎重でそれによ來する。だが、スペンサーを始めとする先きに記した社会学者哲学者の見解を併せて「社会進化の法則は未だ確立せられたりと謂うを得ず」(『社会進化論』―二九三頁)としながらも、その可能性をキリスト教に適用して神の国「天国の出現が進化發展の徑路を取つ」といふ(『久遠の基督教』以下久遠と略称、Ⅱ八二頁)それは聖書にいう天国それ自体が客観的に進化の法則に即して展開しているのではなく、「天国」が人間自身の意識の進化發展に即して解釈されるべきであるという謂で、このことは、小山のイエス論にはつきり示される筈である。

(3)諸主義統一の方法 諸主義統一といつても具体的にはけっきょく諸宗教であるが、この考え方そのものがおかしいという意見もある。けれども事の当否はともかくとして、それは小山の信念のごとくなっている。二高時代 仙台にきた海老名弾正の「諸主義統一論」という題で一席弁じた講演をきいた。どんな内容か今のところはっきりしないが、聴衆の一人だった青年小山は、たまたま個人主義、家族主義、国家主義、世界主義その他諸々のイズムの取捨撰択に迷っていた折柄でもあつたので関心をそそられるところが大きかった。「予の性格は絶えず思想の統一を求む。矛盾の苦悶は到底堪うる所にあらざりし也。昨日既に然り、今日猶お然り、五城樓下(仙台)の一迷羊は海老名牧師の一喝を縁として、少くとも爾來十有餘

年、内心の統一を保持し來りぬ」(「信仰婦一の確信」明治四三年、Ⅱ四二四頁)。海老名が聞いたらかえつてびっくりするような執念を東北の青年は心にいだき、それを繰りかえし繰りかえし反芻していた。だから幼少期のキリスト教や仏教の些細な事が念頭を離れず、あるいは二高生徒の時分、自分と行き方を異にする親友齊藤野の人にも魅了された。兄樗牛を喪つて、「その深酷なる煩悶を積くべく前賢先哲の跡を辿り」「十九世紀の文明史を飾る芸術家思想家の門戸を敲き光明と希望とを求めんとし」「寧ろ煩悶懊悩の間、君自らの心靈の奥より閃めき出たる光明の燈を辿りて、心身靈肉兩つながらを満足せしむ可き新しき実証を捉えんとし」て求むる真摯な姿がそれである。齊藤の求めるところは古代ギリシャの精神、イプセン、ワッツ、ニイチェ、トルストイあり、また仏教ありで捉えがたくあるが、生死を超脱し、世俗に超然たる態度を支えているものに、小山は注目していた(「齊藤信策君を憶う」明治四二年、Ⅲ五二―六頁以下)。それは自分と彼との間に主義こそ異れ、心中深く諸主義統一の信念が蔽然として藏されていたからにはかならない。

三

私はいよいよ小山のキリスト教信仰思想について考察する段階に入るが、その場合前段にのべた小山のアプローチの方法と關聯して考察せねば事を誤る。私は三つの方法の順を無差別に並べたわけはない。この三者は相互に絡んで具体的に小山のアプローチの方法になつているが、それを抽象化し分類すると三者になる。その中もっとも重点的に考察を払わねばならないのは、(1)の自己中心的

思考法である。私が小山の見解であつと驚くのは、この自己中心的思考法が最後まで生き残つてゐる点である。彼はいつてゐる。「或人は他力門に入り、或人は自力門に入る。或人は伝統的信仰に頼り、或人は自由的思索に頼り、或人は現性本位を唱え、或人は情意中心を唱える。或人は静坐冥想を重んじ、或人は活動奮闘を重んずる。その孰れを選ぶかは全く個人の性格に依る可く、一定の規矩に依る可きでは無い。」その選択は当人に任す可きだと（前掲「全人の生活を想う」Ⅱ四五―Ⅱ五五頁）。私は右のような選択がどこまで承認されるか疑問に思つてゐる。「他力門」とはそもそも自分の意志の選択の外に成立つ。選択に要する人間の力量、明智、意志、情意等いっさいがあげてその無能無力を暴露され、あとかたなく粉碎されてしまひ如何とも術なく「父よ信なき我を救い給え。」このどたん場に立たれてはじめて他力門は開かれる。人間・自己が開くのではなく、相手方（仏・神）の慈悲、愛が開くのであるから、そこには選択など生起しうる筈はない。キリスト教をもつて他力門としてよいかどうかはともかくとしても、キリストの降誕、その十字架の死と復活の事実が福音として働くのは人間の選択の彼方の世界からであつて、そこには必然的に人間中心主義、自己中心主義、自己の最高価値の顛倒は不可避である。正直な話、私は「自力門」すら選択の極限の外にあり自力による安心本悟以外に道はないと覚醒することと自他じつは覚醒せしめられてゐるのではあるまいか。こう考へてゐる。

ところが、小山は福音、イエス・キリストに関して独自の見解に基いていて（後記）、彼の人間自己中心的思考法、その最高価値体

系はいささかも乱れを見せずに生きてゐる。根本において彼が自己を「解放せられた自由主義者」「自由主義信徒」の列に加え、たしかに自由キリスト教徒たるゆえんはこの辺にあるのであつて、それ故にいう。「自由キリスト教徒は既に古来の伝説を棄て一切の束縛より脱出せりと唱え、法王の權威も、教会の權威も、聖書の權威も、信条儀式其他の權威も悉く之を否定したり。凡そ歴史の認められる総べての權威なる者は、最早自由主義信徒の眼には、一種の骨董品たるに過ぎず。鑑賞の味は之れあらんも、支配の力ありとは許さざる也。自由主義は斯くて一切の權威を葬りぬ。」小山は自己以外の外的權威とその価値をいっさい拒否する（「信仰上の中心問題」明治四三年、Ⅱ四〇―Ⅱ四九頁）。小山の所説はすこぶる大胆であるが、小山自身むろんこけおどしに言つてゐるのではない。かかる權威とその価値を覆す權威とその価値を弁はること、それが個人主観の權威、いいかえるならば、個人の内的なる信仰の權威である。といつてゐる。そもそもその個人の「信仰の權威」を生ずるものは何か。それは、「只個人心内の実験自証に在り。之を外にして權威なる者無しとは、多くの人の揚言する所也。此見地よりすれば、聖書も一個の古書に過ぎず、その価値は個人の實驗を註釈するに在るのみと唱えらる。」（同上、四一―四二頁）。自己個人の内的実験自証だといふ。しかもキリスト教そのものに関する内的実験自証であつた。

この自己の内的実験なる概念はひとり小山のみでなく、明治の初代キリスト教徒小崎弘道、植村正久、海考名弾正、内村鑑三はかに等しくみられるところで、①日本にキリスト教の伝統は皆無といつ

てよい。それだけに彼等にとって信ずるということは大きな実験を意味した。②キリスト教に限ったことではなくおよそ宗教一般について言えることだが、それは内的実験を経なければ理解されないし生命の支えとはならない。それは全体的生命に関わることで、たんなる知、たんなる情また意志の対象ではないからである。③近代的我が彼等に芽生えていてその自我の心的実験を経なければその宗教（キリスト教）が真理だといえない。これらのことから「実験」なる概念が援用されたと思うが、小山の場合はむしろ初代キリスト教徒とちがった③が、濃く色彩っている。そして同じ実験ならば、誰しも同じ結果、解答が出るのが当然なのに、じっさい彼等に自覚整正されて来るキリスト教思想そのものはそれぞれ特色をもった異ったものであった。それは興味深い問題だが、一言にしていえば、それは「内的実験」の名は共通でもその方法が各自異っているからにほかならない。（この点についてはまた別に考察する機会を得たい。）ここでは小山にかぎってのべるのであるが、作業としての「実験」を検討するについて前記キリスト教への彼のアプローチの方法を想い起して貰いたい。じつは前記(1)自己中心的思考法、(2)進化的論的方法、(3)諸主義統一への方法この三者が彼の「内的実験」のなかで絡りながら作業して、ほかならぬ小山の実験の方法になっているのである。

この点を彼のキリスト教に関する主著『久遠の基督教』に即してみたい。「巻頭の告白」に「予は第一に近代思想の感化を蒙り、第二に東洋意識の圧迫に遇いぬ。予は此二大思想に盲目なる能わず、而かも予が基督教的信仰は、之を同化し終る可く、余りに微弱なる

者思想と生命の自得とは、予に於て沈痛なる要求となりぬ。本書の緒説は其間の消息を述べし者々」（二三頁）とある。これは私のいう方法論からするならば、(1)がここに浮き彫りにされている。小山には自我の解決がせまられている。「近代思想の感化を蒙り」とはそれであるが、それは「東洋意識（仏教）」によって生起されたというより、それに解決を見出そうとした。どうしても、「予は此二大思想に盲目なる能わず」で「思想と生命の自得」とが自分へ「沈痛なる要求」だといっているのはその間の消息を示し、「本書の緒説は其間の消息を述べし者」といっているように、本書の「緒説」は(1)に関する過程をのべている。そして以下それを抜きにして「本論」の前篇「耶穌の福音」、後篇の「福音の真髓」が論ぜられないところに前記方法の(3)が前提となっていてことが理解されよう。「本論」そのものに関していうならば、(2)がその内容を体系化することによって、(1)の自我を解決する点に重点がおかれている。

四

耶穌は十字架に死しぬ。而かも直ちに弟子達の精神に復活し、世々国々の信者の心に蘇生したり。十字架上の耶穌を見て彼を死せりと信じたるは猶太人の大いなる謬見なりき。耶穌は長しえに活くる也。是故に耶穌の人格は初代クリスチャンの信仰を反映せる四福音書に現れると同時に、中世紀に於ける聖者信者達の思想信仰にも現れる也。否、そのあらゆる変化を以てして、近世基督教徒の思索と生活と信念とにも、耶穌の人格は現れる也。耶穌の人格は、夫れ自身に於て、久遠の創造力、

無限の生命力也。初代クリスチャンの理解せる処は恐らく其一部分ならん。中世僧徒の理解せる処亦恐らくは其半面なりしならん。近世思想家の探索し想像する処亦確かにその合体とは言う可からず。耶蘇の人格は、一千九百年の昔、ユダヤの野に於て開頭し尽されしに非ずして、一千九百年を通して、今も猶ほ新に開頭せられつつある最高精神其者にてある也。故に耶蘇の人格を尋ぬる者は考古学者の職分にあらずして、全く人類最高の精神を味う丈けの能力と志望とを有する求道者の使命にてある也。ある意味に於て、吾儕は耶蘇の人格を自ら創造し行く者なり。否、永遠より準備せられ、而して一千九百年前、ナザレに生れ出でし耶蘇の人格は、自ら泉の源頭となりて人類の中に新しき生命の流を湧かしめ、吾儕は今現にその流の中に游泳しつつ、自らの人格を通して、何等か新しき或物を之に貢獻せんとするなり。云々

(「耶蘇の人格と生命の創造」大正元年、Ⅱ三二八、九頁)。

少々長い引用文であるが、ここにはまず(A)イエス、耶蘇に関して(2)の進化論的方法で捉えられていることがはっきりしている。イエスの人格はその奥行きわめて深く、それをどのように捉えその生命の力をくめど尽せぬものをもっている。それは永遠に人類に新しき生命の流れを湧かさしめる源泉である。それ故古代、中世、近世と人は次から次へと新らしく捉えてきた。けれどもそれらはいずれもイエスの一面半面にすぎないのであって、けつしてその全貌ではない。それ故、今日われわれはまた過去の伝統から解放されてイエスの人格を創造することができる。イエス自身一九〇〇年以來そのこ

とをいつも期待しているのである。かような把握がなされている。(B)次に前に記しているところからわかるように、いっさいを耶蘇、イエスに重点をおいて論じている。所でキリスト教の正統的見解としていわれる三体一体論なるものがある。キリスト・イエスのほかに父なる神と聖き靈とがあり、キリスト教の神はこの三者たることに於いて人間に働きその信仰がなされ、そのいづれを欠如してもキリストの神は成立しない。しかるに小山に於てはそれらが全然説かれてないということはないが、もつぱらイエス、耶蘇に重点が集中されている。「基督教の他宗教に卓越せる点は、ナザレの耶蘇の人格にあり」(「現代日本に對し基督教の最強調すべき使命」明治四五年、Ⅱ四九五頁)といっているのはその間の消息を示すものであるが、耶蘇、イエスをどのように規定しているかという点、「耶蘇の人格に現われたる恩寵と真理とが、久遠の福音」(同頁)としてである。そのように見てくると、『久遠の福音』(全集Ⅱ)に於ける本論が、耶蘇の福音(前篇)と福音の真髄(後篇)に二大別されて説かれているゆえんが察知できようが、むしろ問題はその解釈の仕方であつて、小山は(A)からして大胆に外的權威に拘束されることなく、合理的に論じ、それは彼の生命の力になっている。

小山が右の書でイエスを論じて非常に精力を使つてゐるのはイエスにまつまる「不可思議なる異能」(二〇〇頁)としての奇蹟の処理である。これについて細々論じてはいるもののイエスの行為に關することについては特に否定していない。けれども処女降誕、肉体復活になつてくるとその事実を拒否する。その伝説において、「ヨセフが義しき人なりし事、マリヤが其心に神靈を感じる程敬虔にして

純潔なる婦人なりし事、耶蘇が此の如き清き家庭の中に生長し給え

る事等を知りて、新に永遠なる教訓を此中より発見」することが出

来る(二一三頁)。パウロがロマ書八・一〇でキリストの復活を証

しているが、それは「蓋し是れ基督の復活を精神的に実験せる保羅

(パウロ)の心証より溢れ出でし靈覺にてある也。耶蘇復活して保

羅に現われたりというは、実は斯の如き内的經驗の謂いなりき」だ

としている(二二七頁)。三福音書の記者も復活のイエスを實際に見

たわけではなく、ただ実見したという伝説を記録したに止る。その

点でパウロだけをとり上げてゐるわけであるが、小山の奇蹟の見解

は非常に慎重である。「彼の聖書に録されたる奇蹟其儘を認むるを

以て信仰の本義と為すが如きは、奇蹟の背後に立る耶蘇の人格と、

時代の情調とを解せざる者なり。」とはいへ信徒にとつてそれらは

「概して貴重な精神的啓示なり」だとしている(二〇八、九頁)。

そこには彼の進化論からくる配慮もあるのだが(二〇五頁)、宗教

的には「靈の実験」という神秘的実験もあり、それは信仰を経験し

ない人には理解できない、という小山の信仰経験が生きている。け

れども「古人の記録によりて、超自然的の奇蹟を肯定するが如きは、

寧ろ神意を冒瀆する」ことはなほだしいものがあるといつてい

る(二〇五頁)。このことは、①小山が仏教に靈覺真心の世界を求

めたあげくキリスト教に真摯に真理を追求している、彼の端正な宗

教的敬虔さを示していると同時に、②しかしキリスト教信仰の核心

であるイエス・キリストについてははじめからこれを人としていわ

ゆる正統的の神人として啓示性を否定し、そうすることによつてその

イエスを中心とするキリスト教信仰思想体系を形成している。そ

こで以下のべるところはこの②に関わつてくる。

五

さて小山はイエスに関してその所謂の旧約に關聯するメシヤ意識

を問題にせずもつぱら神人意識を問うている。「神の国は近ずけり

悔い改めよ」。これがイエスの第一声であるが、「神の国とは靈的

生命是れ也。神を主として之に仕うる心靈の王国是れ也」(七一頁)。

人間には「靈性」がある。それが神とつながら神と結び神と一つと

なることによつて永生、無窮の生を享ける。それは「時間を超越す

る絶対の生命」の意味で、永生とは「心靈の王国を我が精神の中に発

見する」ことにほかならない(七一、二頁)。小山は事を内的に、

理解しようとする。そしてこの神に繋る心靈の生活、神に仕える精

神、自覚こそ、久遠にして且つ眞実なる生命に觸るる実験こそ宗教

の奥儀であり、福音の中心眼目だという(八〇頁)。福音はイエ

ス・キリストの生涯とそのメッセージとを抜きにして考えることは

できない。しかし小山はイエスにおいて神が謙(へりくだ)つて人

貌をとつて世に顕われたというわけでないから、逆にイエスの十字

架の死と復活とにそれほど拘らなくとも済む。だから「余は仮令耶

蘇にして鮮血を十字架に流し給はざりしとするも、彼の人格に溢れ

たる聖なる神の愛を認めて、之を尊崇する者なり。予は耶蘇が病の

ため安らかに逝き給いしとするも、彼の心を以て神の心とするに於

て足らざる所ありと思わざるなり。」(二三六、七頁)。それな

らばイエスの死を無視してよいか。小山はけつして無視していな

い。無視するのはイエスの死によつて人類の贖いが成就したと

いう贖罪の説である。そして小山はイエスのエルサレムへの上京も死せんがためだけでなくこの首都で福音を全国にのべるためだといふ（二三八頁）。

エルサレムに上るイエスはすでにユダによって売られていることを知った。イエスはそこから遁走してガリラヤに出ることもけつして難事ではなかった。しかしかかる「恥辱の悶めき」はイエスになく、神のあたえる苦難を安んじて受けた。エルサレム上京にあたってサマリヤ人はイエスを受けなかったのでヤコブ、ヨハネが憤慨してエリヤのごとく火を降して彼等を滅ぼそうといったとき、自分は何人も滅ぼすための使命をもつてはいないといつて愛に満ちた人格を示している。イエスが捕縛されると、イスラエル十二支族の軍勢を糾合することも不可能ではなにかかわらず、剣を取る者は剣によつて滅ぶとしてこれを退けた。オリブ山の最後の試練も免れようとするれば免れることが出来た。ゲツセマネの杯も「此杯を我より離ち給え」祈りながらも「されど我心の儘に成さんとするに非ず、聖旨に任せ給え」として従容として縛についた。十字架の「吾神吾神何ぞ我を遣て給う乎」の最後の絶叫は詩篇第二二篇ダビデの歌の冒頭の句で「民の裔のうちにはエホバに仕らるる者あらん、主のことは代々に語り伝えらるべし、彼等来りて、こはエホバの御業なりとて、その義を後に生るる民に宣べ伝えん」という一大希望をもつて結ぶ聖歌である。聖書釈義で右のようにとつて、イエスの十字架上の死について（復活については別に解釈する）「その死は耶蘇の故意を以て撰びし者にはあらざれど、耶蘇に在りてそは踏むべき最上の道なりき。彼は遁走せず、争闘せず、只神意のまにまに順従しぬ。彼の

肉体は終に十字架の上に死せり。されど死は最後にてはあらざりき。彼の偉大なる精神は此死に由りて永しえに生きたり。然り、彼は主たる神にのみ仕らるるが爲めに、其生命を棄てたる也。神を愛すると同じく人類を愛するが爲に其鮮血を流したる也。」そして結んでいふ。「神を愛し隣を愛するの精神、否、之よりも更に大なる天父の愛心其者は、彼の死に由りて、最も分明に、最も莊嚴に、人類の心に鏤刻せられぬ」（二四〇—三頁）。

「心靈」「靈性」は神より人間に与えられた賜物で、それを自分のなかに自覚して、神に仕え神と共に生き神と共にある。その時こそ光明、心靈の光明をまざまざと感じ、永生を体験するときである（七五頁）。ここに神の愛が実現される。してみると、イエスの十字架の死はまったく此の地上、俗世への欲すなわち肉を離れてひたすらの心靈のうち、神とともに生きようとする神の愛にこたえるものである。「ヒューマニティーに現われたるデヴキニティーを意味する。」「耶蘇の人格に現わるる神的性質」がそこに感得されると説く（二四六—七頁）。十字架の死に深く感動して弟子たちも「漸く耶蘇の精神に徹し、耶蘇の精神は、猛烈なる勢を以て彼等の心裏に復活した」（二四六頁）。ここにイエスの死の二大意義が覺られるであらうといふ。こうして

第一 信仰上より見る上に十字架上の死は、耶蘇の人格の生み出せる自然の果実にして、死生を一貫するその神的生命（愛）は之に由りて鮮かに顯われたり。

第二 歴史上より見るに、十字架の死は、忽ち復活の信仰を起して、基督教会の成立原因を為し、且つ世々国々の信徒をして

耶蘇の愛に触れしむる大原動力たりし者なり。(二四三—四頁)

彼の『久遠の基督教』は根本的にこの上に構築されているのである。

以上が小山の内的実験を媒介にして自証されたキリスト教思想の論理である。そこには進化論的方法、諸主義統一の方法がみられる。と同時に、自己中心的思考法がたらぬかれているのである。私は右に小山の内的実験といった。実験によって自証された結果は、それが妥当であるかぎり普遍的なものであるが、しかし内的実験そのものはあくまで当人の自我の内面のことで、個人的事柄に属する。してみると、右の聖書解釈によって構造化された小山のキリスト教思想を生んだ小山の個人的実験の内実とは何か、私はそれが彼のいう霊肉の争いとその解放で、肉の欲(名譽欲、財産欲から學問、芸術、宗教に及ぶ欲求)から脱して、いかに靈的生活に入るかという事で、それが彼の最大の問題であった。肉の欲に彼は罪を見出したが、それはけつして神にたいする反逆ではなかつた。これが小山の個人的特長で、それ故「心靈」「靈性」が神からあたえられて解決する。そのもつともよい模範がイエスであつたわけで、イエスの死は神の愛をもつともよく示したシンボルであつても、けつして贖罪の行為ではなかつた。

むすび 日本キリスト教史上の小山の位置

紙教も大分超過したので簡単にのべる。小山が自分の自由キリスト教徒としての立場をはつきりさせたのは、同五十五年一月二高の

後輩鈴木文治(明治一八—昭和二一)とともに本郷教会より統一基督教会に転籍してからで、その翌月『久遠の基督教』が上梓されている。

同教会はユニテリアン協会本部が分裂し佐治突然、広井辰太郎らに日本ユニテリアン協会を組織したので、のこつた内ヶ崎作三郎らが中心になつて東京芝区(現港区)芝園橋畔の惟一館に設けた。岸本能武太、安部磯雄などがこれを助けた。内ヶ崎が献身的に毎日曜日説教を担当し、三並良らもこれを補つて一時はなかなかさかんであつた。小山もしばしばその講壇に立つたが、やがて関西に赴いて去つた。

『久遠の基督教』には自由キリスト教徒としての小山のキリスト教信仰思想がみられるが、この書の特長は、それが小山の我信ず(ego)の証言であり、告白である点にある。小山は職業にさんざ迷ひ迷ひぬいたと私は屢言した。だがそれにもかかわらず牧師伝道者、神学者たらんとした気配はぜんぜんない。あくまで世俗的職業人として生きたわけで、『久遠の基督教』はその道の専門家の著書ではない。その内容も正統的キリスト教に立つものでないこともあつて、この書を意気込んで評価して人はあまりいない。それならば路傍の石のごとく無視されたかという、けつしてそうではない。限られてはいるが、小山の名とともに本書を知っている人が必ずしも少くないのに驚かされる。本書には小山が道を力を真理を求め、仏陀からイエスにたどりついたそのあとを正直にしかも銜うことなくのべられている。自分が幼少の時分から探し求めたものはけつきよく神の愛で、それをはじめてイエスに発見した。「然らば道徳上宗教上の世界的普遍的原理を何処に求むべき。吾人は素より

基督教の中に発見す』（「文明上に於ける日本クリスチャンの地位」明治四二年、一三九四頁）。しかもイエスにおいてである。それによって自分の眼からうろこが落ちたように覺った。前にみたイエスに現われた神の愛が、宣教をもふくみこれを止揚した真理である。それ以外に真理は存在しない。このような真摯な求道の姿勢と彼の証言が、全巻を蔽うている。前に小山の内的実験自証といったが、『久遠の基督教』はその実験自証そのものであり、そこに築き上げられている小山のキリスト教思想はかかる実験を瀟過したものであった。

私は小山の生涯を見たが、彼は学校を卒業後新聞記者、教授、政治家のそのいずれを選択したにせよ、常に自分を根本から覆して検討をせねば止まなかつた。それは具体的にいえば自我の問題の一言につきよう。霊と肉、主観と客観の相剋で、これをいかに処して名誉欲、財産欲はおろか学問、芸術追求にからまる自我拡充の我欲から脱却した自由な自我を形成するか。その解決をけつきよくイエスに現われた神の愛に見出した。この神の愛に欣び感謝して肉を脱する自由をもつ自我を自覚したのであった。小山によってイエスはあくまで人間であり、神の愛を実現することによって極限にまでその自我の自由を發揮した。それ故、神の愛の下に愛の自由をもつ自我は、いっさいの「外的權威」から解放されねばならない。この自我はすべての中心であり、いっさいの価値の基軸である。そうしてまた、このことを自覚した「解放された自由主義者」「自由主義信徒」には「凡そ歴史の認められる総べての權威なる者は（中略）一種の骨董品たるに過ぎない。」さかのぼって彼等が「既に古来の伝説を

棄て一切の束縛より脱せりと唱え、法王の權威も、教会の權威も、聖書の權威も、信条儀式其他の權威も悉く之を否定した」のも（前掲）かかる自我の確立とその自由に由来する。自由キリスト教徒小山の前には日本基督教教会の信条も、日本組合基督教教会の組織も、日本メソヂスト教会の教虔主義も權威をもたなかつたのである。

右の論文を作製するに當つて、宮城県立図書館、気仙沼市立図書館、尚綱女学院図書館、本郷教会牧師大倉桃代氏、並びに平素教示をいただいている斎藤勇先生より多大の教示を受けたことを記し、感謝申し上げたい。